

〔論文〕

# 親育ち尺度作成の試み

—子育て支援の質的向上を目指して—

楠 本 洋 子  
Yoko Kusumoto

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科

**要約:**本研究は、現代の子育て環境の変化に対応した「親育ち尺度」を作成するとともに、その「親育ち尺度」が回答者の属性によってどのようなちがいを生じるかを明らかにすることを目的とする。そのため、就学前の子どもを持つ親に「子どもを持つことによる親育ち（心理的発達）」についての質問紙調査を実施したところ、841名より回答を得た。その回答を分析した結果、「自己の強さ」「生き甲斐・存在感」「協調性」「自己制御」「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感（主に健康への関心）」「柔軟さ」の7因子が抽出され、これらの因子で構成された尺度を「親育ち尺度」と命名した。この「親育ち尺度」の下位尺度得点が一番高かったのは「生き甲斐・存在感」であり、次いで「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感」「協調性」などの順であった。

次に、この「親育ち尺度」と回答者の属性別分析を実施したところ、①施設のちがいによる分析から、育児と就業を両立させれば、「自己の強さ」「自己制御」「柔軟さ」の3因子が育つこと、②就業形態のちがいの分析から、就業することにより「自己の強さ」が育ち、一方、非就業の専業主婦では子どもと向き合う時間が長いことから「子どもに対する責任感」が育っていること、③子ども数のちがいの分析から、子どもを多く育てることによって、「自己の強さ」「協調性」「柔軟さ」が大きく育っていること、④育児経験年数のちがいの分析から、育児経験年数の積み重ねが親を育てていくものであること、⑤近所に友人の有無のちがいの分析から、親育ちの得点が高い母親には友人が多いことなどが明らかになった。

キーワード：親育ち尺度、協調性、生き甲斐・存在感、育児経験年数、友人

## I 問題の所在と目的

2015（平成27）年4月から「子ども・子育て支援新制度」が施行された。これについて大豆生田啓友は「この新制度の目的は、子ども・子育て支援法第一条にあるように、『一人一人の子どもが健やかに成長することができる社会の実現に寄与すること』にあります。そのために、すべての子どもと子育て世代をすべての世代が協力し、社会全体で支えていくような仕組みを形成することなのです」とし、具体的な取り組みとして4点を挙げている。そのうちの2点は「子育て支援」に関することであり、一つは「幼児期の学校教育や保育、地域のさまざまな子育て支援の量の拡充や質の向上を進めること」であり、もう一つは「子どもが減っている地域の子育てもしっかり支援すること<sup>1)</sup>」である。

この「子育て支援」について小池由佳は「二つの側面」を指摘し、「『少子化対策』の際に用いられる『子育て支援』と『親としての子育て』を支援する際に用いられる『子育て支援』に分けている。その「少子化対策」の際に用いられる子育て支援は「いかに子育てと仕事の

両立を可能とするか」を目的とし、「安心して働くことのできる環境と子育てをする時間の確保の二つが大きな要因<sup>2)</sup>」となり、行政が行ってきた具体的な制度施策的なものとして「少子化対策推進基本方針」「新エンゼルプラン」「少子化対策プラスワン」を挙げている。その後行政の少子化対策・子育て支援の流れは、「次世代育成支援対策推進法」制定、「子ども・子育て応援プラン」策定、「待機児童ゼロ作戦」推進、さらに親の就労と子育てが両立する「ワーク・ライフ・バランス」という支援に発展し、2010（平成22）年に「子ども・子育て新システム検討会議」が開かれたことを皮切りに、2012（平成24）年には「子ども・子育て関連3法」が可決・成立し、「子ども・子育て支援新制度」の施行に繋がっている。

一方、「親としての子育て」を支援する際に用いられる「子育て支援」について、山縣文治は、子育て支援を育ち・育てられる関係の支援として「生物的次元の親子関係は極めて単純なものであるが、社会的次元あるいは心理的次元の親子関係は、非常に複雑である。単に『育てる親』と『育てられる子』が存在するだけではない<sup>3)</sup>」とし、「子育て支援サービスのターゲットは、大きく四つ

ある<sup>4)</sup>』としている。その第一は、子ども自身の成長・発達支援の「子育ての支援」、第二は、親になるための支援の「親育ち支援」、第三は、育ち・育て合う親子支援の「子育て・親育て支援」、第四は、家庭および地域社会の「育む環境の支援」であり、「子育てをする親を『育てる』という視点が必要となる<sup>5)</sup>」。この「親を育てる」という意味において、汐見稔幸は、子育て支援は育児の肩代わりではなく、「親の自立育児支援<sup>6)</sup>」が必要であると指摘し、大日向雅美が「子育て支援は『親育ち支援』とする必要がある<sup>7)</sup>』としていることと一致している。

この「親育ち支援」の重要性は、保育分野では「親育ち支援」、看護分野では「親性の支援」、心理学分野では「親となることによる発達（成長）支援」などのテーマで研究が継続されていることから明らかであろう。

親育ち支援に関する先行研究は、表 I-1 に示したとおりである。そのうち、柏木恵子他（1994）による『「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み<sup>8)</sup>』は、「親となる」ことによって親にどのような人格的・社会的な行動や態度に変化（親の発達）が生じたかを、就学前幼児を持つ父母を対象に比較検討を行い、「親の発達尺度」として6因子を抽出し、及川裕子（2005）の「親性の発達に関する研究—乳幼児の親性

の因子構造と背景要因の検討—<sup>9)</sup>』は、親になることによって起こる変化を「親性の発達」とし、父母による質問紙調査より「親性への発達尺度」として6因子を抽出している。さらに、永井知子他（2015）による「親育ちに影響を与える要因の検討（1）—親育ちの構成要因の検討—<sup>10)</sup>』は、さまざまな子育て環境の変化を想定した親育ち支援の在り方を検討するため、質問調査により現代の母親の親育ちに関する認識と出産前後の変化を検討した結果、親育ち尺度として3因子を抽出している。

そこで本研究では、親育ち支援に関する先行研究を参考に、就学前の子どもを持つ親に「子どもを持つことによる親育ち（心理的発達）」についての質問紙調査をし、現代の子育て環境の変化に対応した「親育ち尺度」を作成することと、子育て支援の質的向上にいささかなりとも寄与することを目的とする。さらに、「親育ち尺度」を構成する下位尺度得点に、親の年齢・学歴・職業・育児経験年数・子ども数などによりどのようなちがいが生じるのかを明らかにする。なお、質問紙作成には、先行研究（表 I-1）を参考に「親育ち項目」を精査し、質問項目を設定する。調査対象は、先行研究に父母を対象とした研究もあるが、未だ子育てに関わるのは母親が多いことから母親だけに限定することとする。

表 I-1 先行研究論文概要一覧表（年代順）

著者	タイトル	キーワード	対象	指標	結果（因子の内容）
柏木他 (1994)	「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み	父親、母親、親の発達、育児、家事参加、性役割	3～5歳の幼児を持つ親—父親および母親 346対	質問紙 ①フェースシート（父親には学歴および育児・家事への参加度、母親には家族構成・子どもの数・性・年齢・学歴および職業の有無・将来計画等を問う質問項目）②「親となる」ことによる変化・発達に関するもの③子どもの育児に対する感情・態度に関するもの④性役割に関する態度・価値観に関するもの	「親の発達」 第1因子：柔軟さ 第2因子：自己抑制 第3因子：運命・信仰・伝統の受容 第4因子：視野の広がり 第5因子：生き甲斐・存在感 第6因子：自己の強さ
及川 (2005)	親性の発達に関する研究—乳幼児の親性の因子構造と背景要因の検討—	親性、親性の発達因子、母親からの被養育体験	関東圏在住の乳幼児を持つ母親 397名	質問紙 親自身の社会的経験をみるものとし、親自身の年齢と母親のみにおいて職業の有無・親としての経験をみるものとして子どもの年齢と子どもの数、親になることへのレディネスや適応力をみるものとして母親からの被養育体験（BPI尺度）を調査	「親性の発達」 第1因子：次世代 第2因子：社会環境 第3因子：生き甲斐 第4因子：家族の絆 第5因子：世代間 第6因子：抑うつ
森下 (2006)	父親になることによる発達とそれに関わる要因	父親、発達、育児関与、夫婦関係、親子関係	都内の私・公立幼稚園4園、幼稚園に通う子どもを持つ父親 740名	質問紙 ①父親になることによる発達②父親の育児関与③夫婦関係満足度④子どもからの働きかけ・態度⑤親役割受容度感⑥性役割観⑦職場環境⑧基本的属性	「父親になることによる発達尺度」 第1因子：家族への愛情 第2因子：責任感や冷静さ 第3因子：子どもを通しての視野の広がり 第4因子：過去と未来への展望 第5因子：自由の喪失

高橋他 (2009)	親になることによる発達とそれに関わる要因	親の発達、親役割受容感、夫婦関係の満足度、父親の育児参加	都内幼稚園5園の園児の744家庭	質問紙 基本属性（年齢・就業形態・家族構成他） ①親になることによる発達②親役割観③夫婦関係の満足度④父親の育児参加	「親になることによる発達尺度」 第1因子：視野の広がり 第2因子：柔軟さ 第3因子：生きがいの展望 第4因子：自己の強さ 第5因子：過去と未来への展望 第6因子：自由の喪失
永井他 (2015)	親育ちに影響を与える要因の検討（1）—親育ちの構成要因の検討—		A県内の幼稚園の養育者110名	質問紙 基本属性（養育者の年齢・子どもの年齢と性別など）①親育ちに関する項目	「親育ち尺度」 第1因子：子どもに対する責任感 第2因子：視野の広さ 第3因子：普遍的価値観

## II 調査方法と調査内容

### II-1 調査方法

- (1) 調査対象施設と対象人数：近畿圏1府3県の幼稚園の母親312名、保育園の母親834名、認定こども園の母親626名の計1,772名である。
- (2) 実施期間：2016（平成28）年3月～5月に実施した。
- (3) 手続き：質問紙調査用紙には調査の目的・倫理的配慮を記して、無記名とし、調査に同意を得られた対象者への配布を対象園に依頼し、自宅で記入後調査用紙を対象園の回収箱に投函してもらうように依頼した。なお本質問紙調査は大阪総合保育大学研究倫理審査委員会の審査承認後、対象園施設長の同意書を得て実施した。
- (4) 親育ち項目の設定：表I-1の先行研究文献より「親育ち項目」を精査し、親育ちを構成する7因子を抽出して質問項目を設定した。その構成は「1. 視野の広がり」因子の下位項目として柏木他（1994）、及川（2005）、高橋他（2009）より、「環境問題（大気汚染・食品公害など）に関心が増した」「物事に積極的に取り組むようになった」「協力することの大切さがわかるようになった」「他人への気遣いが出来るようになった」「一人ひとりがかけがえのない存在だと思うようになった」などの8項目、「2. 生き甲斐・存在感」因子の下位項目として、柏木他（1994）、高橋他（2009）より、「家族の中で安らぎを感じるようになった」「人生における充実感を感じるようになった」「家族への愛情が深まった」「生きている張りが増した」「自分がなくてはならない存在だと思うようになった」などの8項目、「3. 子どもに対する責任感」因子の下位項目として及川（2005）、永井他（2015）より、「健康を考え、食事

を作る」「子どもへの関心が強い」「子どもへの愛情が深まった」「親としての責任を感じる」「子どもの成長が楽しみである」などの8項目、「4. 過去と未来への展望」因子の下位項目として及川（2005）や森下（2006）、高橋他（2009）、佐藤（2005）より、「自分の親が自分をどのように育ててくれたのか考えるようになった」「親への感謝の気持ちが増した」「自分の親を尊敬できるようになった」「自分と親の関わりを思い出し将来の自分と子どもとの関わりを想像するようになった」「自分の親との関係が良くなった」「子どもを持つ親の気持ちがわかるようになった」などの8項目、「5. 柔軟さ」因子の下位項目として柏木他（1994）、高橋他（2009）より、「考え方が柔軟になった」「精神的にタフになった」「角が取れて丸くなった」「寛大になった」「小さなことにくよくよしなくなった」などの8項目、「6. 自己の強さ」因子の下位項目として柏木他（1994）、高橋他（2009）、山口（2008）より、「周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できるようになった」「より計画的になった」「自分の信念に基づいて生きていこうと思うようになった」「目標（目的）に向かってがんばれるようになった」「妥協しなくなった」などの8項目、「7. 自己制御」因子の下位項目として柏木他（1994）より、「他人の迷惑にならないように心がけるようになった」「自分のほしいものなどが我慢できるようになった」「他人の立場や気持ちをくみとるようになった」「自分の分をわきまえるようになった」「節約するようになった」などの8項目の計56項目である。

### II-2 調査内容

- (1) 「問1 回答者の属性」は、年齢、学歴、職業、子ども数など9項目である。

- (2) 「問2 パートナーの属性と育児関与に関する項目 (本研究では未分析)」
- (3) 「問3 子どもの状況」は、「性別」「年齢」の2項目である。
- (4) 「問4 親育ちに関する項目 (5件法)」は、「II-1 (4) 親育ち項目の設定」で精査した56項目である。
- (5) 評価は5段階評価とし、「5 よくあてはまる」= 5点、「4 少しあてはまる」= 4点、「3 どちらとも言えない」= 3点、「2 あまりあてはまらない」= 2点、「1 全くあてはまらない」= 1点とした。
- (6) 分析方法の統計学的処理は、IBM SPSS Statistics Ver21を用いて分析を行った。

### Ⅲ 調査結果

#### Ⅲ-1 配布数と有効回収数、有効回収率

調査票の有効回収率は、全体47.5% (有効回収数/配布数: 841 / 1772)、であり、施設別では、幼稚園35.3% (110 / 312)、保育園47.5% (396 / 834)、認定こども園53.5% (335 / 626)であった。

#### Ⅲ-2 属性分布

##### (1) 年齢分布

平均年齢は35.8歳、標準偏差は4.74であり、最年少は21歳、最年長は49歳であった。年齢区分「21～29歳」84名(10.0%)、「30～34歳」233名(27.7%)、「35～39歳」336名(40.0%)、「40～44歳」168名(20.0%)、「45歳以上」20名(2.3%)であった。

##### (2) 最終学歴分布

最終学歴分布は、学歴区分「中学」19名(2.3%)、「高校」152名(18.1%)、「専門学校」160名(19.0%)、「短大・高専」213名(25.3%)、「大学」276名(32.8%)、「大学院」19名(2.3%)、「未記入」2名(0.2%)であった。このことから、「大学卒」が一番多く、次の「短大・高専」「専門学校」および「大学院」を合わせた高等教育機関の学歴所有者は約8割であった。

##### (3) 職業分布

職業分布は、「専業主婦」268名(31.9%)、「会社員」273名(32.5%)、「公務員」65名(7.7%)、「自営業」39名(4.6%)、「その他(パート)」193名(22.9%)、「未記入」3名(0.4%)であった。これらのことから、「会社員」、「公務員」、「自営業」、「その他(パート)」を合わせた就業者は6割強であり、非就業者である「専業主婦」の3割強と比較すると、就業者が非就業者の約2倍であった。

##### (4) 子ども数分布

子ども数の平均は2.02人で偏差値は0.75であった。子ども数の分布は、「子ども1人」189名(22.5%)、「子ども2人」476名(56.6%)、「子ども3人」152名(18.1%)、「子ども4人」20名(2.4%)、「子ども5人」3名(0.3%)、「子ども7人」1名(0.1%)であった。これらのことから「子ども2人」が約6割弱で一番多く、次いで「子ども1人」、「子ども3人」の順であった。

##### (5) 育児経験年数分布

平均育児経験年数は6.03年で標準偏差は3.31であった。育児経験年数分布は、「0～4年」307名(36.5%)、「5～7年」306名(36.4%)、「8～9年」107名(12.7%)、「10年以上」120名(14.3%)、「未記入」1名(0.1%)であった。

##### (6) 家族形態分布

家族形態分布は、「核家族」748名(88.9%)、「両親で親族と同居」41名(4.9%)、「ひとり親」33名(3.9%)、「ひとり親で親族と同居」19名(2.3%)であり、「核家族」が約9割であった。

##### (7) 近所(車で10～15分位)に実家の有無分布

「近所に実家あり」403名(47.9%)、「近所に実家なし」438名(52.1%)であった。

##### (8) 近所(車で10～15分位)に友人の有無分布

「近所に友人あり」651名(77.4%)、「近所に友人なし」190名(22.6%)であった。

#### Ⅲ-3 因子の構成

「親育ち」項目の全データに基づいて、主因子法バリマックス回転で因子分析し、第8因子まで抽出されたが、因子負荷が|.40|に満たなかった5項目を除いて再度分析し、解釈可能な7因子を採用した。項目内容、心理学的意味および因子負荷量行列は表Ⅲ-3-1に示し、抽出された7因子までで全分散の45.84%が説明された。表Ⅲ-3-1から、第1因子は「IV-48 物事に積極的になった」「IV-27 多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった」「IV-13 自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと考えるようになった」などの項目を含む12項目からなり、先行研究の柏木他(1994)の「自己の強さ」に対応し、全分散の29.814%が説明されたため、本研究においても同じく因子名を「自己の強さ」と命名した(信頼性係数 $\alpha = .896$ )。

第2因子は「IV-31 子どもへの愛情が深まった」「IV-23 生きている張りが増した」「IV-9 人生における充実感を感じるようになった」などの項目を含む15項目からなり、先行研究の高橋他(2009)の「生き甲斐・存在感」に一部対応し、全分散の5.257%が説明されたため、本研究においても同じく因子名を「生き甲斐・存在感」



表Ⅲ-3-1 「親育ち尺度」の因子分析結果

「親育ち尺度」 因子分析結果 (主因子バリマックス法)

		因子・平均・標準偏差								
		Fac1	Fac2	Fac3	Fac4	Fac5	Fac6	Fac7	M	SD
<b>Fac1 自己の強さ</b>	$\alpha=.896$ $M=3.546$ $SD=.593$									
IV-48 物事に積極的になった		.674	.162	.197	.238	.026	.108	.127	4.11	.78
IV-27 多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった		.654	.026	.156	.076	.031	.078	.153	3.16	.85
IV-13 自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと考えるようになった		.635	.119	.198	.034	.090	.175	.180	3.78	.87
IV-8 物事に積極的に取り組むようになった		.625	.130	.199	.041	.103	.216	.089	3.65	.84
IV-41 妥協しなくなった		.607	.101	.109	.182	.002	.010	-.059	3.20	.79
IV-20 自分の信念に基づいて生きていこうと思うようになった		.605	.135	.228	.033	.057	.246	.199	3.55	.85
IV-6 周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できるようになった		.605	.029	.075	.062	.088	.207	.190	3.52	.85
IV-47 度胸がついた		.520	.203	.154	.322	.041	.048	.213	3.83	.90
IV-54 小さなことにくよくよしなくなった		.494	.132	.071	.312	.114	-.062	.271	3.51	.93
IV-34 目標(目的)に向かってがんばれるようになった		.487	.222	.264	.290	.098	.103	.200	3.85	.85
IV-44 一人前(大人)になった気がした		.431	.277	.031	.256	.052	-.049	.029	3.31	.90
IV-53 自分が今まで生きてきたことを次の世代に伝えていくのだと考えるようになった		.428	.301	.016	.282	.134	.040	.075	3.61	.92
<b>Fac2 生き甲斐・存在感</b>	$\alpha=.894$ $M=4.464$ $SD=.449$									
IV-31 子どもへの愛情が深まった		.005	.706	.106	.103	.103	.138	.215	4.72	.55
IV-24 子どもへの関心が強くなった		.028	.641	.189	.111	.115	.182	.187	4.69	.54
IV-38 親としての責任を感じるようになった		.028	.573	.202	.149	.132	.149	.025	4.75	.49
IV-16 家族への愛情が深まった		.148	.568	.127	.049	.152	.240	.107	4.58	.64
IV-23 生きている張りが増した		.329	.566	.111	.039	.045	.243	.177	4.24	.79
IV-46 子どもを持つ親の気持ちがわかるようになった		.135	.523	.181	.192	.186	.022	.034	4.62	.60
IV-50 一人一人がかけがえのない存在だと思うようになった		.242	.509	.229	.194	.089	.114	.062	4.43	.73
IV-52 子どもの成長が楽しみである		.001	.501	.009	.161	.110	.084	.080	4.81	.46
IV-2 家族の中で安らぎを感じるようになった		.218	.497	-.063	.057	.089	.254	.203	4.26	.82
IV-37 長生きしなければと思うようになった		.224	.495	.139	.072	.040	.069	-.071	4.32	.87
IV-45 親の実感があるようになった		.292	.494	.081	.243	.109	-.005	.024	4.20	.83
IV-9 人生における充実感を感じるようになった		.390	.489	-.013	-.003	.065	.256	.144	4.22	.81
IV-30 自分がなくてはならない存在だと思うようになった		.311	.483	.161	.036	.054	.090	.086	4.15	.87
IV-43 いろいろな人に支えられていると感じるようになった		.087	.475	.312	.120	.229	.074	.022	4.55	.64
IV-25 自分と親のかかわりを思い出し将来の自分と子どものかかわりを想像するようになった		.069	.448	.179	.099	.315	.134	.154	4.41	.78
<b>Fac3 協調性</b>	$\alpha=.855$ $M=4.090$ $SD=.583$									
IV-29 協力することの大切さが分かるようになった		.213	.222	.664	.171	.137	.096	.068	4.22	.75
IV-28 人との和を大事にするようになった		.232	.226	.614	.184	.088	.116	.112	4.12	.80
IV-21 他人の立場や気持ちをくみとるようになった		.311	.200	.559	.114	.128	.180	.237	4.07	.75
IV-36 他人への気遣いができるようになった		.310	.215	.522	.356	.090	.084	.163	4.01	.76
IV-7 他人の迷惑にならないように心がけるようになった		.202	.185	.412	.264	.213	.157	.027	4.40	.71
IV-42 自分の分をわかまえるようになった		.336	.228	.405	.342	.098	.051	.102	3.71	.81
<b>Fac4 自己制御</b>	$\alpha=.829$ $M=3.902$ $SD=.597$									
IV-49 儉約するようになった		.150	.139	.164	.537	.062	.250	.004	3.89	.89
IV-56 思い通りにならないことがあっても我慢できるようになった		.237	.207	.259	.494	.002	.048	.307	3.82	.80
IV-55 より計画的になった		.384	.199	.097	.469	.058	.138	.083	3.74	.85
IV-51 目先のことより、将来のことを考えて行動するようになった		.306	.293	.182	.463	.067	.181	.099	4.01	.85
IV-33 我慢強くなった		.239	.158	.279	.453	.111	.010	.375	3.97	.88
IV-14 自分のほしいものなどが我慢できるようになった		.114	.129	.228	.445	.087	.211	.104	4.05	.88
IV-35 自分本意の考えや行動をしなくなった		.236	.191	.379	.420	.008	.135	.194	3.82	.83
<b>Fac5 自分の親への感謝</b>	$\alpha=.804$ $M=4.315$ $SD=.650$									
IV-18 自分の親を尊敬できるようになった		.109	.185	.145	.074	.840	.033	.036	4.26	.88
IV-11 親への感謝の気持ちが増した		.034	.241	.050	.010	.787	.089	.053	4.50	.78
IV-39 自分の親との関係が良くなった		.209	.291	.164	.149	.519	-.047	.033	4.01	.90
IV-4 自分の親が自分をどのように育ててくれたのか、考えるようになった		.074	.297	.101	.062	.455	.227	.118	4.49	.70
<b>Fac6 子どもに対する責任感</b>	$\alpha=.702$ $M=4.270$ $SD=.603$									
IV-1 環境問題(大気汚染・食品公害など)に関心が増した		.177	.141	.109	.080	.001	.643	-.015	4.11	.79
IV-17 食事に使う食品の産地、原材料を気にするようになった		.058	.228	.146	.104	.032	.537	-.032	4.29	.81
IV-3 健康を考え、食事を作るようになった		.090	.280	-.040	.243	.094	.493	.129	4.41	.67
<b>Fac7 柔軟さ</b>	$\alpha=.775$ $M=3.764$ $SD=.673$									
IV-5 考え方が柔軟になった		.311	.185	.078	.115	.095	.172	.611	3.86	.84
IV-26 寛大になった		.307	.197	.220	.189	-.012	.049	.587	3.58	.88
IV-19 角が取れて丸くなった		.337	.178	.246	.120	.091	.034	.462	3.58	.86
IV-12 精神的にタフになった		.343	.210	.051	.141	.122	.124	.423	4.03	.90
累積寄与率(%)		29.814	35.071	37.905	40.491	42.565	44.271	45.841		

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴う<sup>a)</sup>リマックス法<sup>a)</sup>

a. 9 回の反復で回転が収束しました。

と命名した（信頼性係数  $\alpha = .894$ ）。

第3因子は「IV-29 協力することの大切さが分かるようになった」「IV-36 他人への気遣いができるようになった」の2項目は先行研究の柏木他（1994）や及川（2005）、高橋他（2009）の「視野の広さ」に対応し、「IV-28 人との和を大事にするようになった」「IV-21 他人の立場や気持ちをくみとるようになった」「IV-7 他人の迷惑にならないように心がけるようになった」「IV-42 自分の分をわきまえるようになった」の4項目は、柏木他（1994）の「自己制御」に対応し、全分散の2.834%が説明された。なお「視野の広さ」と「自己制御」の内容を持つ今回の6項目に対して本研究では因子名を新しく「協調性」と命名した（信頼性係数  $\alpha = .855$ ）。

第4因子は「IV-49 儉約するようになった」「IV-56 思い通りにならないことがあっても我慢できるようになった」「IV-35 自分本意の考えや行動をしなくなった」などの7項目を含む項目からなり、先行研究の柏木他（1994）の「自己制御」や高橋他（2009）の「生き甲斐・存在感」に一部対応しており、全分散の2.585%が説明されたため、本研究において項目内容から因子名を「自己制御」と命名した（信頼性係数  $\alpha = .829$ ）。

第5因子は「IV-18 自分の親を尊敬できるようになった」「IV-4 自分の親が自分をどのように育ててくれたのか、考えるようになった」などの4項目を含む項目からなり、高橋他（2009）と及川（2005）、森下（2006）の「過去と未来への展望」に一部対応して全分散の2.075%が説明されたが、本研究においては、項目内容が自分の親との関係を扱った内容であるため、本研究では因子名を新しく「自分の親への感謝」と命名した（信頼性係数  $\alpha = .804$ ）。

第6因子は「IV-1 環境問題（大気汚染・食品公害など）に関心が増した」「IV-3 健康を考え、食事を作るようになった」などの3項目を含む項目からなり、先行研究の永井他（2015）の「子どもに対する責任感」2項目と柏木他（1994）の「視野の広さ」1項目と対応し、全分散の1.706%が説明されたため、本研究において因子名を「子どもに対する責任感（主に健康への関心）」と命名した（信頼性係数  $\alpha = .702$ ）。

第7因子は「IV-5 考え方が柔軟になった」「IV-19 角が取れて丸くなった」などの4項目を含む項目からなり、先行研究の柏木他（1994）と高橋他（2009）の「柔軟さ」に対応し、全分散の1.570%が説明されたため、本研究においても同じく因子名を「柔軟さ」と命名した（信頼性係数  $\alpha = .775$ ）。

以上、第1因子「自己の強さ」、第2因子「生き甲斐・存在感」、第3因子「協調性」、第4因子「自己制御」、第

5因子「自分の親への感謝」、第6因子「子どもに対する責任感」、第7因子「柔軟さ」の七つの因子が抽出された。

そして、各因子の負荷量の高かった項目によって構成された下位尺度を「自己の強さ」（12項目）、「生き甲斐・存在感」（15項目）、「協調性」（6項目）、「自己制御」（7項目）、「自分の親への感謝」（4項目）、「子どもに対する責任感」（3項目）、「柔軟さ」（4項目）と命名し、これらの下位尺度の計51項目によって構成された尺度を「親育ち尺度」と命名した。なお、この「親育ち尺度」の下位尺度得点が一番高かったのは「生き甲斐・存在感」であり、次いで「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感」「協調性」「自己制御」「柔軟性」「自己の強さ」の順であった。

### Ⅲ-4 各因子間の相関係数

各因子の相関マトリックスを検討するために、「親育ち尺度」で求められた七つの下位尺度得点を次のように求めた。それは各因子の項目得点を合計し、項目数で割り、平均値を算出した。その各因子間の相関係数は表Ⅲ-4-1に示し、各因子間に有意な正の相関が認められた。特に「協調性」と「自己制御」の.702、「自己の強さ」においては、「自己制御」と.661、「柔軟さ」と.653、「協調性」と.647が強い相関を示していた。また、7因子とも5段階評価における平均値は3.5以上であり、「生き甲斐・存在感」が4.46と一番高かった。

### Ⅲ-5 「親育ち尺度」と属性別分析

「親育ち尺度」の下位尺度得点が、母親の属性によってどのように影響されているかをみた。各属性と下位尺度得点における分散分析およびt検定の結果をそれぞれ表Ⅲ-5-1から表Ⅲ-5-8に示した。なお、分散分析において5%水準で差がみられた因子については、多重分析（Turkey法）を行った。

#### （1）施設（幼稚園、保育園、認定こども園）別の場合

幼稚園、保育園、認定こども園という施設の持つ特徴が、下位尺度得点にどのような影響を与えているかをみた。施設別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、表Ⅲ-5-1に示した。

表Ⅲ-5-1より、「自己の強さ」「自己制御」「子どもに対する責任感」「柔軟さ」の4因子で有意な差があった。「①幼稚園」では「子どもに対する責任感」において、「②保育園」と「③認定こども園」より有意に得点が高かった。「②保育園」では「自己の強さ」「自己制御」「柔軟さ」において、「①幼稚園」より有意に得点が高かった。

表Ⅲ-4-1 各因子間の相関係数

	自己の強さ	生き甲斐・存在感	協調性	自己制御	自分の親への感謝	子どもに対する責任感	柔軟さ
自己の強さ	—						
生き甲斐・存在感	.582**	—					
協調性	.647**	.597**	—				
自己制御	.661**	.577**	.702**	—			
自分の親への感謝	.350**	.522**	.430**	.341**	—		
子どもに対する責任感	.345**	.465**	.368**	.397**	.243**	—	
柔軟さ	.653**	.537**	.543**	.577**	.322**	.305**	—
平均値 (M)	3.55	4.46	4.09	3.90	4.32	4.27	3.76
標準偏差 (SD)	.59	.45	.58	.59	.66	.60	.67

\*\* : P < .01

表Ⅲ-5-1 施設のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	施設	①幼稚園(N=110)		②保育園(N=396)		③認定こども園(N=335)		F (df=2, 838)	グループ間 有意差検定		
		M	SD	M	SD	M	SD		①-②	①-③	②-③
第1因子	自己の強さ	3.360	.694	3.612	.584	3.528	.593	8.204 ***	**		
第2因子	生き甲斐・存在感	4.433	.430	4.469	.459	4.468	.443	.299			
第3因子	協調性	4.042	.531	4.095	.609	4.094	.568	.380			
第4因子	自己制御	3.758	.639	3.939	.604	3.904	.567	3.994 *	*		
第5因子	自分の親への感謝	4.268	.733	4.292	.663	4.358	.605	1.280			
第6因子	子どもに対する責任感	4.464	.575	4.181	.643	4.311	.542	11.033 ***	***	*	**
第7因子	柔軟さ	3.573	.668	3.813	.672	3.768	.667	5.565 **	**	*	

\*\*\* P < .001 \*\* P < .01 \* P < .05

「③認定こども園」では、「子どもに対する責任感」において「②保育園」より有意に得点が高く、「柔軟さ」において「①幼稚園」より有意に得点が高かった。

(2) 年齢の場合

年齢によるちがいが、下位尺度得点にどのような影響を与えているかをみた。母親の年齢区分を「① 21～29歳」「② 30～34歳」「③ 35～39歳」「④ 40歳以上」の4区分とし、年齢区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、すべての区分において有意差はなかった。

(3) 学歴の場合

学歴のちがいが、下位尺度得点にどのように影響しているかをみた。学歴区分を「①中学・高校卒」「②専門学校・短大卒」「③大学・大学院卒」の3区分とし、学歴区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、表Ⅲ-5-2に示した。

表Ⅲ-5-2より、「自己の強さ」「協調性」「自己制

御」「柔軟さ」の4因子で有意な差があることが分かった。「①中学・高校卒」では「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「柔軟さ」の4因子において、他のすべての区分より有意に得点が高かった。「②専門・短大卒」では「自己制御」において、「③大学・大学院卒」より有意に得点が高かった。

(4) 就業形態の場合

就業形態のちがいによって、下位尺度得点にどのような影響があるかをみた。母親の就業形態区分を「①専業主婦」「②常勤」「③非常勤」の3区分とし、就業形態区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、表Ⅲ-5-3に示した。

表Ⅲ-5-3より、「自己の強さ」「子どもに対する責任感」「柔軟さ」の3因子で有意な差があることが分かった。「②常勤」「③非常勤」では「自己の強さ」において、「①専業主婦」より有意に得点が高かった。「①専業主婦」では「子どもに対する責任感」において、「②常勤」より有意に得点が高かった。「③非常勤」では「柔軟さ」にお



表Ⅲ-5-2 学歴のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	学歴	①中・高(N=171) ②専門・短大(N=373) ③大学・大学院(N=295)						F (df=2, 836)	グループ間 有意差検定		
		M	SD	M	SD	M	SD		①-②	①-③	②-③
第1因子	自己の強さ	3.729	.586	3.526	.577	3.469	.594	11.082 ***	***	***	
第2因子	生き甲斐・存在感	4.510	.450	4.454	.457	4.448	.438	1.189			
第3因子	協調性	4.240	.549	4.098	.574	3.990	.594	10.215 ***	***	***	
第4因子	自己制御	4.020	.538	3.907	.619	3.832	.589	5.432 **	**	***	*
第5因子	自分の親への感謝	4.262	.704	4.371	.610	4.280	.657	2.400			
第6因子	子どもに対する責任感	4.314	.585	4.236	.645	4.290	.557	1.214			
第7因子	柔軟さ	3.901	.657	3.717	.669	3.748	.678	4.547 *	**	*	

\*\*\* P < .001 \*\* P < .01 \* P < .05

表Ⅲ-5-3 就業形態のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	就業形態	①専業主婦(N=268) ②常勤(N=338) ③非常勤(N=232)						F (df=2, 835)	グループ間 有意差検定		
		M	SD	M	SD	M	SD		①-②	①-③	②-③
第1因子	自己の強さ	3.441	.541	3.571	.609	3.634	.611	7.190 ***	*	***	
第2因子	生き甲斐・存在感	4.450	.432	4.454	.480	4.497	.418	.839			
第3因子	協調性	4.119	.517	4.042	.625	4.127	.584	1.976			
第4因子	自己制御	3.877	.579	3.902	.631	3.933	.566	.549			
第5因子	自分の親への感謝	4.351	.607	4.292	.688	4.303	.644	.652			
第6因子	子どもに対する責任感	4.361	.548	4.195	.639	4.277	.598	5.702 **	**		
第7因子	柔軟さ	3.688	.657	3.777	.697	3.841	.645	3.273 *		*	

\*\*\*P < .001 \*\* P < .01 \* P < .05

いて、「①専業主婦」より有意に得点が高かった。

(5) 子ども数の場合

母親の持つ子ども数のちがいが、下位尺度得点にどのような影響を与えているかをみた。母親の持つ子ども数区分を「①1人」「②2人」「③3人以上」の3区分とし、子ども数区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、表Ⅲ-5-4に示した。

表Ⅲ-5-4より、「自己の強さ」「協調性」の2因子で有意な差があった。「③子ども3人以上」では「自己の強さ」「協調性」において、「①子ども1人」と「②子ども2人」より有意に得点が高かった。

(6) 育児経験年数の場合

育児経験年数のちがいが、下位尺度得点にどのような影響を与えているかをみた。育児経験年数区分を「①0～4年」「②5～7年」「③8～9年」「④10年以上」の4区分とし、母親の育児経験年数区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、表Ⅲ-5-5に示した。

表Ⅲ-5-5より、「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「柔軟さ」の4因子で有意な差があることが分かった。

「④10年以上」では「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「柔軟さ」において、「①0～4年」より、有意に得点が高かった。「④10年以上」では「自己の強さ」「柔軟さ」において、「②5～7年」より有意に得点が高かった。「④10年以上」では「自己の強さ」「自己制御」「柔軟さ」において、「③8～9年」より有意に得点が高かった。

(7) 家族形態別の場合

家族形態のちがいによって、下位尺度得点にどのような影響があるかをみた。家族形態区分を「①核家族」「②両親と親族同居」「③ひとり親」「④ひとり親と親族同居」の4区分とし、家族形態区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は、表Ⅲ-5-6に示した。

表Ⅲ-5-6より、「生き甲斐・存在感」の1因子で有意な差が認められた。「①核家族」「②両親親族同居」「③ひとり親」では「生き甲斐・存在感」において、「④ひとり親親族同居」より有意に得点が高かった。

(8) 近所(車で10～15分位)に実家の有無の場合

近所(車で10～15分位)に実家が「あり(有)」「なし(無)」に分け、有無のちがいによって、下位尺度得点にどのような影響があるかをみた。近所に実家の有無別



表Ⅲ-5-4 子ども数のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	子ども数	①1人(N=186)		②2人(N=478)		③3人以上(N=176)		F (df=2, 837)	グループ間 有意差検定		
		M	SD	M	SD	M	SD		①-②	①-③	②-③
第1因子	自己の強さ	3.512	.584	3.521	.595	3.645	.585	3.201 *		*	*
第2因子	生き甲斐・存在感	4.463	.449	4.457	.449	4.480	.451	.167			
第3因子	協調性	4.054	.619	4.063	.568	4.190	.576	3.489 *		*	*
第4因子	自己制御	3.889	.621	3.879	.591	3.971	.582	1.570			
第5因子	自分の親への感謝	4.301	.716	4.330	.609	4.286	.689	.350			
第6因子	子どもに対する責任感	4.244	.607	4.294	.580	4.229	.659	.945			
第7因子	柔軟さ	3.739	.628	3.733	.683	3.868	.682	2.753			

\* P < .05

表Ⅲ-5-5 育児経験年数のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	育児経験	①0~4年(N=307)		②5~7年(N=306)		③8~9年(N=107)		④10年以上(N=120)		F (df=2, 836)	グループ間 有意差検定					
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		①-②	①-③	①-④	②-③	②-④	③-④
第1因子	自己の強さ	3.502	.562	3.528	.601	3.464	.595	3.771	.599	7.269 ***		***	***	***		
第2因子	生き甲斐・存在感	4.482	.439	4.436	.470	4.406	.463	4.535	.394	2.165						
第3因子	協調性	4.031	.595	4.107	.568	4.059	.586	4.208	.573	2.903 *		**				
第4因子	自己制御	3.882	.590	3.905	.619	3.798	.535	4.027	.590	2.982 *		*				**
第5因子	自分の親への感謝	4.325	.643	4.325	.684	4.311	.597	4.263	.632	.310						
第6因子	子どもに対する責任感	4.249	.587	4.275	.592	4.202	.673	4.367	.601	1.612						
第7因子	柔軟さ	3.746	.642	3.736	.711	3.645	.653	3.977	.627	5.470 ***		***		***	***	***

\*\*\* P < .001 \*\* P < .01 \* P < .05

表Ⅲ-5-6 家族形態のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	家族形態	①核家族(N=748)		②両親同居(N=41)		③ひとり親(N=33)		④ひとり親同居(N=19)		F (df=3, 837)	グループ間 有意差検定					
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		①-②	①-③	①-④	②-③	②-④	③-④
第1因子	自己の強さ	3.530	.5884	3.585	.6151	3.788	.6588	3.680	.5131	2.421						
第2因子	生き甲斐・存在感	4.469	.4452	4.462	.4352	4.507	.4397	4.182	.5617	2.641 *		**		*	*	
第3因子	協調性	4.081	.5803	4.110	.6243	4.253	.5577	4.000	.6211	1.073						
第4因子	自己制御	3.894	.6021	3.913	.5578	4.074	.4963	3.880	.6122	.968						
第5因子	自分の親への感謝	4.324	.6435	4.195	.7342	4.318	.6854	4.237	.6946	.598						
第6因子	子どもに対する責任感	4.282	.5977	4.276	.5911	4.152	.6927	4.000	.6383	1.794						
第7因子	柔軟さ	4.000	.6806	3.817	.5506	3.671	.6832	3.671	.5836	.864						

\*\* P < .01 \* P < .05

の各因子における下位尺度得点を t 検定した結果は、表Ⅲ-5-7に示した。

表Ⅲ-5-7より、「自己の強さ」「協調性」「柔軟さ」の3因子で有意な差があることが分かった。「実家あり」では、「自己の強さ」「協調性」「柔軟さ」において、「実家なし」より有意に得点が高かった。

(9) 近所(車で10~15分位)に友人の有無の場合

近所(車で10~15分位)に友人が「あり(有)」 「なし(無)」に分け、その有無のちがいが、下位尺度得点に

どのように影響しているかをみた。近所に友人の有無別の各因子における下位尺度得点を t 検定した結果は、表Ⅲ-5-8に示した。

表Ⅲ-5-8より、すべての因子で有意な差が認められた。「友人あり」では、「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感」「柔軟さ」の6因子において、「友人なし」より有意に得点が高かった。

表Ⅲ-5-7 近所に実家の有無のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	実家	実家あり (N=403)		実家なし (N=438)		t (df=839)
		M	SD	M	SD	
第1因子	自己の強さ	3.603	.611	3.493	.571	2.68 **
第2因子	生き甲斐・存在感	4.492	.438	4.438	.457	1.74
第3因子	協調性	4.132	.570	4.046	.591	2.14 *
第4因子	自己制御	3.934	.587	3.872	.604	2.14
第5因子	自分の親への感謝	4.335	.638	4.297	.662	.85
第6因子	子どもに対する責任感	4.259	.633	4.280	.574	.51
第7因子	柔軟さ	3.816	.686	3.716	.658	2.15 *

\*\*  $P < .01$  \*  $P < .05$ 

表Ⅲ-5-8 近所に友人の有無のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	友人	友人あり (N=403)		友人なし (N=438)		t (df=839)
		M	SD	M	SD	
第1因子	自己の強さ	3.598	.582	3.368	.595	4.72 ***
第2因子	生き甲斐・存在感	3.598	.433	4.348	.481	3.85 ***
第3因子	協調性	4.158	.546	3.846	.638	6.11 ***
第4因子	自己制御	3.947	.570	3.747	.658	3.80 ***
第5因子	自分の親への感謝	4.359	.623	4.163	.719	3.41 ***
第6因子	子どもに対する責任感	4.305	.590	4.149	.633	3.04 **
第7因子	柔軟さ	3.812	.652	3.597	.717	3.71 ***

\*\*\*  $P < .001$  \*\*  $P < .01$ 

#### IV 考察

親育て尺度について：子どもを持ち親になることによって育つ心理的発達を「親育ち」とし、幼稚園、保育園、認定こども園に在籍する園児の母親に、先行研究を参考にして7因子と各因子に8項目を想定した質問紙調査を実施し、841名より回答を得た。その結果「自己の強さ」「生き甲斐・存在感」「協調性」「自己制御」「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感（主に健康への関心）」「柔軟さ」の7因子が抽出され、下位尺度の計51項目によって構成された尺度を「親育ち尺度」と命名した。そして先行研究より想定された「視野の広さ」8項目のうち1項目は「自己の強さ」へ、2項目は「生き甲斐・存在感」へ、2項目は「協調性」へ、1項目は「子どもに対する責任感」への項目になり、2項目は因子負荷量が|.35|であり、|.40|に満たないため除いている。さらに先行研究の柏木他（1994）や及川（2005）、高橋他（2009）の「視野の広さ」に対応する「IV-29 協力することの大切さが分かるようになった」「IV-36 他人への気遣いができるようになった」の2項目と、柏木他（1994）の「自己制御」に対応する「IV-28 人との和を大事にするようになった」「IV-21 他人の立場や気持ち

をくみとるようになった」「IV-7 他人の迷惑にならないように心がけるようになった」「IV-42 自分の分をわかまえるようになった」の4項目の計6項目に対して、本研究では内容から「協調性」と命名した。このことから、現代の子育て環境の中で就学前の子どもを持つ親が「子どもを持つことによる親育ち（心理的発達）」として、先行研究の「視野の広さ」と「自己制御」から成り立つ「協調性」が育つと捉えていることが分かった。

この「親育ち尺度」の下位尺度得点が一番高かったのは「生き甲斐・存在感」であり、次いで「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感」「協調性」「自己制御」「柔軟性」「自己の強さ」の順であった。この「生き甲斐・存在感」からは、就学前の子どもを持つ親にとっては子どもが親の生き方の中心にあることが窺え、「自分の親への感謝」からは、森本恵他が母親の影響について「母親との関係が女性の生き方に関連していることが言える」や「母親の生き方から受ける感情により母性意識が形成されることが考えられる<sup>11)</sup>」としていることに繋がるものがあると考察された。

「親育ち尺度」と属性別分析について：「親育ち尺度」と回答者の属性別分析を実施した結果、施設のちがいによる分析より、幼稚園が「子どもに対する責任感」にお

いて、保育園と認定こども園より有意に得点が高かった。このことについて、幼稚園児の母親は専業主婦率（73%）が高いことから、子どもに関わる時間が長いことが窺え、「子どもに対する責任感」が育っていると推察される。一方保育園が「自己の強さ」「自己制御」「柔軟さ」において、幼稚園より有意に得点が高かったことから、保育園児の母親は、就業率（98%）も高いため、育児と就業の両立をさせれば「自己の強さ」「自己制御」「柔軟さ」の3因子が育っていると推察される。

学歴のちがいの分析から、「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「柔軟さ」の4因子で有意な差があり、「中学・高校卒」がこれらの4因子において、他のすべての区分より有意に得点が高かった。しかし、この結果は一概に学歴のちがいで生じているとみるのではなく、佐藤淑子（2012）が「父親と母親の職業生活および家族生活と家事・育児行動<sup>12)</sup>」において、「高学歴無職」と「高学歴有職」、「低学歴無職」、「低学歴有職」のグループに分けて有意差を求めていることを考慮すると、学歴別就業形態別といった他の属性との分析を合わせて判断する必要があると考えられる。

就業形態のちがいの分析から、「常勤」「非常勤」は「自己の強さ」において、「専業主婦」より有意に得点が高かったことから、就業することによって、「自己の強さ」が育つと推察される。一方非就業の「専業主婦」では「子どもに対する責任感」において、「常勤」より有意に得点が高かった。これは、施設のちがいによる分析で幼稚園が保育園より「子どもに対する責任感」が高かった理由に、「専業主婦」率の高さが影響していることが示唆されたように、子どもと向き合う時間の長さが責任感を増大させていると推察される。また「非常勤」では「柔軟さ」において、「専業主婦」より有意に得点が高かったことから、職場や子どもを通じた対人関係では「柔軟さ」が育つことが考えられる。

子ども数のちがいの分析から、「子ども3人以上」では、「自己の強さ」「協調性」において「子ども1人」と「子ども2人」より有意に得点が高かったことから、子どもを多く育てる中で、「自己の強さ」「協調性」「柔軟さ」が育っていると推察される。

育児経験年数のちがいの分析から「10年以上」では、「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「子どもに対する責任感」の4因子のすべてにおいて、「0～4年」より有意に得点が高かったことをはじめ、「5～7年」とでは「自己の強さ」「生き甲斐・存在感」「柔軟さ」において、「8～9年」とでは「自己の強さ」「生き甲斐・存在感」「子どもに対する責任感」「柔軟さ」において、有意に得点が高かった。このことから育児経験年数と、有意差が

なかった母親の年齢を併せ考慮すると、親育ちは母親の年齢に関係なく、育児経験年数の長さとともに親が育っていくものと考えられる。

近所に実家の有無のちがいの分析から、「実家あり」では「自己の強さ」「協調性」「柔軟さ」において、「実家なし」より有意に得点が高かったことから、実家が近くにある場合は、実家との関係性を含め、対人関係において「自己の強さ」「協調性」「柔軟さ」が育つと推察される。

近所に友人の有無のちがいの分析から、「生き甲斐・存在感」以外の、6因子「自己の強さ」「協調性」「自己制御」「自分の親への感謝」「子どもに対する責任感」「柔軟さ」において、「友人なし」より「友人あり」が、有意に得点が高かったことから、親育ちの得点が高い母親には友人が多いことなどが明らかになった。

以上、本研究においては、841名もの回答者に基づき、親育ち尺度を構成した。この構成は多いデータ数と質問項目の精査により、群のデータ数が多く属性の分析に安定した結果が得られた。そして親育ちの心理的発達、保育施設の特徴のちがいや母親の就業形態のちがいなどで異なることや、親育ちには母親の年齢よりも育児経験年数や友人の存在が影響していることが明らかになった。

## V まとめと今後の課題

本研究は、「子ども・子育て新制度」に謳われている「子育て支援の質の向上を進める」ことに着目し、「親育ち」の視点を含む質問紙調査を実施した。その結果、7因子からなる「親育ち尺度」を提示するとともに、回答者の属性別分析によるちがいを明らかにした。今後の課題として、学歴の相違で必要と考えられた分析をはじめ、今回分析に至らなかった「パートナーの属性と育児関与に関する項目」から、父親の育児関与が「親育ち」にどのような影響を与え、さらに「親育ち」が母親の養育態度にどのような影響があるのかなどを明らかにし、「親が育つ効果的支援内容」を提示したい。

### 【引用文献】

- 1) 大豆生田啓友 2016 「地方発の保育・子育て支援の新たな可能性」『発達』146号 ミネルヴァ書房 p.2
- 2) 小池由佳 2003 「子育て支援」の二つの側面～「少子化対策」と「親育ち」～ 『県立新潟女子短期大学研究紀要』第40号 pp.33-35
- 3) 山縣文治 2002 『現代保育論』 ミネルヴァ書房 p.38
- 4) 山縣文治 2000 子どもを見る目は変わったか 『発達』84号 ミネルヴァ書房 p.70
- 5) 山縣文治 2002 前掲書 p.36
- 6) 汐見稔幸 2000 無免許運転?の親を励ます 『発達』84号



- ミネルヴァ書房 p.72
- 7) 大日向雅美 2003 子育て支援は「親育ち支援」『そだちの科学 (1)』日本評論社 p.129
  - 8) 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 『発達心理学研究』第5巻 第1号 pp.72-83
  - 9) 及川裕子 2005 親性に関する研究—乳幼児の親性の因子構造と背景要因の検討—『埼玉県立大学紀要』Vol.7 p.2
  - 10) 永井知子・富田喜代子他 2015 親育ちに影響を与える要因の検討 (1) —親育ちの構成要因の検討— 『日本保育学会第68回大会論文集』 p.99
  - 11) 森本恵・中嶋由香里・山地健二 2000 大学生女子の結婚、

- 出産、育児および就業に関する意識調査 『高知医科大学紀要』第16号 p.9
- 12) 佐藤淑子 2012 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動 『鎌倉女子大学紀要』第19号 p.31

#### 【謝辞】

本研究を行うにあたり丁寧なるご指導を賜りました関係各位、そして調査を行うにあたりご協力してくださいました保育園、幼稚園、認定こども園の施設長はじめ職員の皆様、保護者の皆様に心より感謝を申し上げます。

## Creation of a Parental Growth Scale to Improve the Quality of Child-Rearing Support

Yoko Kusumoto

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

#### Abstract

The aim of this study was to create a “parental growth scale” in response to changes in the modern childcare environment and contribute to improvements in the quality of child-rearing support. We also attempted to clarify the kinds of changes produced in respondent attributes by scores on the subscales that make up the parental growth scale. For that purpose, we conducted a questionnaire survey on “growth (psychological development) as a parent from having children,” and obtained responses from 841 mothers with children aged 0–5 years old. Seven factors were extracted from the results: “mental strength,” “reason for living/presence,” “cooperativeness,” “self-control,” “gratitude to one’s parents,” “sense of responsibility toward one’s children,” and “flexibility.” The scale consisting of these factors was called the “parental growth scale.” The highest score on this parental growth scale was for “reason for living/presence.”

Next, this scale was analyzed by respondent attributes. The following findings were obtained: (1) from an analysis by differences in facility that the 3 factors of “mental strength,” “self-control,” and “flexibility” are developed if a mother balances child-rearing and work, (2) from an analysis of differences in work style that “mental strength” is developed from working and “sense of responsibility toward one’s children” is developed from long hours spent face-to-face with children in full-time homemakers, (3) from an analysis of differences with the number of children that “mental strength,” “cooperativeness,” and “flexibility” are greatly developed by raising a larger number of children, (4) from an analysis of differences in the number of years’ experience caring for children that as experience raising children accumulates the parent grows, and (5) from an analysis of whether or not a mother has friends in the neighborhood that mothers with high parental growth have many friends.

**Key words** : parental growth scale, cooperativeness, reason for living/presence, number of years’ experience caring for children, friends